

第3回 和歌山県古墳時代研究会の報告

開催日時：平成24年6月30日（土）13:30～16:30

開催場所：和歌山県立紀伊風土記の丘（和歌山市岩橋1411番地）

発表：

「紀伊における環畿内型埴輪（紀伊型埴輪）研究の現状と課題」

藤藪勝則（（公財）和歌山市文化スポーツ振興財団）

環畿内型（紀伊型、IV群系）と呼称される古墳時代後期の円筒埴輪について、これまでの研究成果の進展と今後の課題について発表していただきました。なお、大日山35号墳ではV群系（畿内型）とIV群系（環畿内型、紀伊型）の両方が出土しており、発表時にそれらの円筒埴輪を観察できるようにしました。

「大日山35号墳の蓋形埴輪について」仲原知之・萩野谷正宏（紀伊風土記の丘）

大日山35号墳の埴輪整理作業を進めている中において、蓋形埴輪が2種類（1本書き沈線による施文と3本平行沈線による施文）に分けられることがわかったので、実物の蓋形埴輪を観察しながらその観察結果を報告しました。

なお予定していた、仲原・萩野谷（紀伊風土記の丘）発表「大日山35号墳の埴輪レプリカ製作について」は時間の関係で発表できませんでした。

参加者：（敬称略）

＜発表者＞藤藪勝則・仲原知之・萩野谷正宏

＜参加者＞河内一浩（羽曳野市教育委員会）、宮原佑治（三重県埋蔵文化財センター）、辻川哲朗（（財）滋賀県文化財保護協会）

（以下風土記の丘ボランティア）津田明子、金森昌子、岡本美代子、橋本、木村健、佐藤広明、川本幸男

発表者3名+10名 計13名

【参加者のコメント・質疑応答】

＜紀伊における環畿内型埴輪研究の現状と課題について＞

河内 : かつて紀伊型を設定した時には、大谷古墳（和歌山市）の埴輪を畿内型、箱谷古墳（日高川町）の埴輪を紀伊型として認識しました。その後、検討を重ねていくうちに、畿内型としていた大日山 35 号墳をはじめとして、1 段目突帯までの底部高の高い V 群系の埴輪については、畿内中央部には類例がないので、畿内型と呼称していいものか難しくなってきました。こうした底部高が高い 1 群も紀伊の特徴だと考えれば、これらも紀伊型の範疇に入れることもできると思うので、このあたりが課題となります。

仲原 : 大日山 35 号墳では畿内型と紀伊型の両方が出土したとっていましたが、この表現はあまりしない方がいいということになりますか？

河内 : これまで畿内型と紀伊型の円筒埴輪は同じ古墳からは出土しないとしていましたが、大日山 35 号墳では両方出土しています。しかし、畿内型としていた V 群系を紀伊型の範疇に含めるのならば、この問題もなくなるのではないかと。船戸箱山古墳（岩出市）では数種類の形態差が大きい円筒埴輪があり、少し違う形態のものもあってもいい。

藤藪 : 大日山 35 号墳では底部高の高い IV 群系 B 類（紀伊型）と底部高の高い V 群系が出土していますが、その比率と配置状況は？

仲原 : まだすべてを観察したわけではないですが、東造出では、造出の墳丘側の 2 段目テラス円筒埴輪列に V 群系が 1 個体配置されているだけで、あとはすべて IV 群系の円筒埴輪です。造出南辺付近と 2 段目テラス円筒埴輪列の調査範囲北端付近に V 群系円筒埴輪の破片が少量認められることから、もう少し配置されていた可能性があります。いずれにしても東造出では IV 群系が圧倒的に多いです。しかし、基壇テラス上の円筒埴輪については検出した 5 本すべてが V 群系円筒埴輪でした。また、2 段目テラスより上方の墳丘斜面では墳丘から転落したと思われるものの中に V 群系が含まれていることから墳丘上に V 群系円筒埴輪が配置されていたことは確実です。ただし、その比率は IV 群系 8 : V 群系 2 程度だと思います。IV 群系が多いことは間違いありません。

藤藪 : 大谷山 22 号墳や井辺八幡山古墳など大形古墳には V 群系が使用されていて、IV 群系は比較的小規模な古墳に採用されていますが、大日山 35 号墳のような大形の古墳に IV 群系が多いとなると、少し様相が違うことになります。

仲原 : 窯跡については、まだ井辺八幡山古墳の近くの森小手穂窯跡しか見つかっていない状況ですか？

- 河内 : 森小手穂窯跡はIV群系の窯で、埴輪窯はこれ以外には未発見です。かつてV群系の窯跡として砂羅谷窯跡を候補としてあげましたが、現状では須恵器窯のみで、砂羅谷窯跡から出土した数点の埴輪は周辺の古墳からの混入だと思います。IV群系の窯跡は、各古墳の近辺で操業している可能性が高く、工人が移動して生産していくというイメージです。V群系については1箇所で一元的に生産している可能性があります。窯跡は確認できていません。
- 藤藪 : 花山の北側斜面で表採されたIV群系の円筒埴輪は大日山35号墳と同じような形態のもので、花山北斜面に窯があった可能性もあります。
- 仲原 : 大日山35号墳の埴輪について、IV群系は赤く、V群系は白～黄色で、見た目に違いがあります。また、形象の一部にはピンク色をしたものがあります。これらは違う窯で焼成された可能性があります。ただ焼成温度による違いで色調に差が出る可能性もありますので、胎土分析などおこなえば、おもしろい結果が出るような気がします。
- 一同 : ぜひ、胎土分析をおこなってください。
- 仲原 : 藤藪さんの発表の中で、最下段突帯と2段目突帯の間隔が狭い形態のものは倒立技法の痕跡ではないかということでしたが、倒立技法をおこなう理由とは何ですか？
- 辻川 : 須恵器系埴輪の製作にはロクロを使用すると考えられ、ロクロは数が少なかったため、乾燥工程で一度ロクロから離して、別の円筒埴輪を製作していきます。ロクロから離れた円筒埴輪を再びロクロの上で製作しはじめるにあたって、反転させて乾燥が進んでいない下部を上部にもって行って製作を続けるのだと思います。
- 河内 : あともうひとつ、石見型埴輪などの基部については、上部が広がる形態であれば盾などの部材が貼り付けにくく、不安定にもなるので、上部はすぼまった形態の方がいい場合に倒立して、すぼまった方を上にする場合があります。
- 津田 : 種類の違うIV群系・V群系の円筒埴輪でも同じように1段目突帯まで埋めていたのですか？
- 仲原 : V群系・IV群系とも1段目突帯の下付近まで埋めています。IV群系円筒埴輪の高さは底部から口縁部まで接合した個体がないので、現在のところ高さを確実に求めることはできていませんが、ほぼV群系と同じ高さだと推測しています。V群系は4条5段、IV群系は5条6段と考えています。基本的には掘形は布掘りなので、ほぼ同じような高さで並んでいたと思われます。

<大日山 35 号墳の蓋形埴輪について>

仲原 : 補足ですが、井辺八幡山古墳と比較すると、笠部の笠縁先端が突帯状になっている形態はよく似ています。しかし、立ち飾りの先端に切り込みが入っているものは大日山 35 号墳にはなく違った特徴です。あと井辺八幡山古墳には用字文と直弧文の 2 種類の施文がありますが、大日山 35 号墳では用字文だけです。大谷山 22 号墳の施文もこれらと違いがありますので、3 古墳については多少違いがあるといえます。

萩野谷 : もうひとつ補足ですが、1 本ずつ沈線を施文するものと 3 本平行沈線で施文するものは、施文する位置も若干違っているほか、立ち飾り部の下部にあるくり込みが、1 本施文の方はしっかりしていて、3 本施文の方はほとんど認められないなどの違いがあります。また 1 本施文の方は立ち飾り表面にハケ目がしっかり観察できます。

辻川 : 笠部の軸受部の口縁に突帯を貼り付けている個体がありますが、これ以外の形態のものはどれくらいありますか？

仲原 : 基本的にはすべて口縁に突帯があるものだけだと思います。井辺八幡山古墳の状況はどうでしょうか？

辻川 : その部分についてしっかりみていなかったもので、今度確認しておきます。

仲原 : 立ち飾り部について 2 種類が確認できた訳ですが、笠部については出土状況などからそれらと対応するものを認識したうえで、違いがあるのかどうか今後確認していきたいと思います。

藤藪 : 大日山 35 号墳の蓋形埴輪の出土状況はどのようになっていますか？

仲原 : 東造出では、朝顔形埴輪は 5～6 本に 1 本の割合で円筒埴輪列に並んでいました。蓋形埴輪の集中部は円筒埴輪 20 数本に 1 箇所程度認められる傾向にあります。これらの集中部は朝顔形埴輪の近くに分布しているようにもみえます。ただし、円筒埴輪上に載せられた状態で出土した訳ではないので、具体的な出土位置は不明です。

河内 : 蓋形埴輪が円筒埴輪の上の載せられていたという前提を一度除外して出土状況を調べた方がいいと思います。蓋形埴輪は墳丘上であって、それが転落したものである可能性もあるので、造出に蓋形埴輪が存在したかどうかも含めて検討してみてください。